The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Cultural Formation Studies VI　はじめに
Author(s)	木村, 茂雄; 小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98081
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

１．*Cultural Formation Studies* Ⅵの刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科が主催する「言語文化共同研究プロジェクト」のひとつとして 2023 年度に進めた共同研究 Cultural Formation Studies (CFS) の報告書である。CFS は、大阪大学大学院人文学研究科（旧言語文化研究科・旧文学研究科）教員と大学院生、名古屋外国語大学教員、バングラデシュのイスラム大学人文社会科学学部教員などを「正規」メンバーとする研究会だが、そこには旧言語文化研究科を修了して大学の教職についているものなど、「非正規」のメンバーも数多く参加している。そして、東京、名古屋、金沢、岐阜などから集まってくるこれらのメンバーを抜きにして、この研究会は成り立たない。これらの OG / OB が現役の院生たちに与えるアドバイスや刺激も、たいへん有意義なことと感じている。

研究会のこのようなメンバー構成には過去の経緯もある。Cultural Formation Studies (CFS) は、26 年前にはじめた研究会の「後継」の「後継」にあたるからだ。その最初の研究会は、1996 年の春に開始したカルチュラル・スタディーズの研究会「カルチュラル・スタディーズ・サークル (CSC)」である。「言語文化共同研究プロジェクト」の制度がスタートしたのは 2000 年度なので、その 4 年前のことになる。その後、2005 年度から 2017 年度までは「ポストコロニアル・フォーメーションズ (PCF)」と研究会の名称を変え、どちらかといえばポストコロニアル研究に焦点を絞った研究を進めてきた。

研究会の名称をこのように変えてきたのは、ひとつには、その時々のメンバーの関心を反映させたためである。この数年は、とくにアメリカ文学・アメリカ文化を専門とする教員や院生のメンバーが増えてきたようだ。しかし、1996 年当時から現在にいたるまで、研究会の名称は変わっても、また、そのメンバーに多少の入れ替えはあっても、文化や文学の研究に対する私たちの基本的な姿勢や視点には、ある連続性が保たれてきたように思われる。簡単にいえば、ひとつには、文化や文学を社会に開かれたものとみなし、その相互関係や相互作用を（必要に応じて「学際的」に）捉えようとする姿勢、そのこととも関連して、もうひとつは、それらの文化や文学が形成されるプロセス（フォーメーション）を注視しようとする姿勢である。

そして、このような姿勢は、私たちがカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究から学んできた姿勢にほかならない。2018 年度から研究会の名称を Cultural Formation Studies (CFS) と改めたのは、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究の基本

姿勢から学びつつも、特定の狭い「分野」に特化した研究会という印象を避け、その門戸を、より幅広く多様な領域に開いていきたいという意図が込められている。

２．2023 年度の CFS の活動

CFS の研究会は従来、原則として毎月の最終土曜日に開催してきたが、2020 年度以降は新型コロナの影響により、しばらく Zoom 開催となり、2022 年度からはハイブリッド開催となった。本研究会では、たいていは文化や文学にかかわる英語文献を取り上げ、それぞれの担当者がその内容を紹介し検討した後、全体討論に入る。このようにして、先行研究の趣旨や意義、欠点や盲点などを議論していく。それはまた、私たち自身の批評意識や批評の言葉を鍛えていくプロセスでもある。

2023 年度の研究会は、昨年度からの継続で、北欧の人類学者が中心となって構成している批評書 *Anthropos and the Material* (2019) を読んだ。

以下に、研究会の記録を残しておきたい。開催日、章およびページ数、担当者の順に示す。研究科の修了生で大学の専任職についているものには、発表時点での現職の大学名も付記しておく。

1. 2023 年 6 月 3 日
   Penny Harvey, Christian Krohn-Hansen, and Knut G. Nustad, eds.
   Anthropos and the Material. Duke University Press, 2019.
   pp. 59-80 Chapter 2 “Contemporary Capitalism and Dominican New Yorkers’ Livery-Cab Bases” 桑原拓也（追手門学院大学）

2. 2023 年 9 月 2 日
   Penny Harvey, Christian Krohn-Hansen, and Knut G. Nustad, eds.
   Anthropos and the Material. Duke University Press, 2019.
   pp. 81-99 Chapter 3 “Anthropos and Pragmata” 小杉世
   pp. 103-121 Chapter 4 “Tabu and Bitcoin” 安保夏絵（中部大学）

3. 2023 年 11 月 18 日
   Penny Harvey, Christian Krohn-Hansen, and Knut G. Nustad, eds.
   Anthropos and the Material. Duke University Press, 2019.
   pp. 122-42 Chapter 5 “Sperm, Eggs, and Wombs” ガデミ・アミン
   pp. 143-60 Chapter 6 “Lithic Vitality” 小倉永慈（名古屋外国語大学）

4. 2024 年 3 月 23 日
   Penny Harvey, Christian Krohn-Hansen, and Knut G. Nustad, eds.

Anthropos and the Material. Duke University Press, 2019.

pp. 161-80 Chapter 7 “Traces of Pasts and Imaginings of Futures in St Lucia, South Africa” 加瀬佳代子（金城学院大学）

pp. 181-95 Chapter 8 “Matters That Matter” 稲垣健志（金沢美術工芸大学）

３．本研究会の来し方、行く末（木村）

前にも述べたように、本研究会は 1996 年に開始された「カルチュラル・スタディーズ・サークル (CSC)」を出発点としている。いまの院生の会員の多くが生まれる前のことだ。ちなみにその当時は、1950 年台のイギリスでレイモンド・ウィリアムズなどにより創始されたカルチュラル・スタディーズが、アメリカやオーストラリア、そして日本にも飛び火して、大きなブームを巻き起こしていた。CSC で最初に取り上げたのも、アメリカで開催された国際学会をもとに編集された *Cultural Studies* (Routledge, 1992) という論集だった。40 編の論考を収めた 700 ページを超えるこの本を完読したあと、1958 年出版のレイモンド・ウィリアムズの出世作 *Culture and Society* に向かっていったことを覚えている。

これは「流行に乗った」といえなくもないだろう。じっさい、学外の聴衆も呼び込んだ「オープン CSC」なるシンポジウムを 2 回ほど企画し、かなりの活況を呈したことなども懐かしい。一方、この時期は、言語文化研究科が発足してから数年後のことで、この新しい研究科の教育研究の方向性を模索していた時期でもあった。いわゆる「伝統的」な文学研究をどのように捉え直していくかという問題意識を、研究科の若手教員が共有していたことも CSC 発足の背景にあったのだ。

私事になるが、新しい文学研究という面でそのころ私が取り組みはじめていたのがポストコロニアル文学だった。この分野の古典的なガイドブック *Empire Writes Back* (Routledge, 1989) を『ポストコロニアルの文学』（木村茂雄訳、青土社）として翻訳刊行したのが 1998 年であり、2004 年には、CSC のメンバーをおもな執筆者とする『ポストコロニアル文学の現在』（木村茂雄編、晃洋書房）を刊行した。2005 年度からは、研究会の名称も「ポストコロニアル・フォーメーションズ」と改めて活動をつづけた。その成果のひとつが、2010 年に刊行された『英語文学の越境―ポストコロニアル／カルチュラル・スタディーズの視点から―』（木村茂雄・山田雄三編著、英宝社）である。同書には、CSC と「ポストコロニアル・フォーメーションズ」の研究報告書を初出とする 10 編の論考が収められている。その執筆者の顔触れは、旧言語文化研究科の教員が 4 名、その院生と元院生が 6 名だった。

この本の出版から 14 年後の現在、研究会は Cultural Formation Studies (CFS) と改称され、新しいメンバーも次々と迎えてきた。現在は『英語文学の越境』の続編にあたる書物を『現代文化の冒険』というタイトルで編纂中である。この本も、CSC から現在にいたる研究会のメンバーをおもな執筆者としている。これまでの私たちの冒険の一端をお示しできるような本にできればと思う。

４．2023 年度をふりかえって（小杉）

ここ数年オンラインやハイブリッドでの開催により研究会を継続してきたが、昨年度は久しぶりに懇親会も開催することができた。2000 年度に言語文化研究科で始まった言語文化共同研究プロジェクトは 20 年を超えて継続されたが、昨年度から電子版のみでの発行となり、頁数の制約が緩和された。研究会も新しいメンバーを迎えている。

昨年度は定例の研究会に加えて、CFS 研究会および高度副プログラム「世界の言語文化とグローバリゼーション」の共催で、基盤研究(B)「環太平洋圏における核と原爆をめぐる想像力と植民地主義の研究」（松永京子代表）による招聘事業「ピーター・ブロウ監督『寡婦たちの村』上映会＆トーク」を 2023 年 12 月 13 日、大阪大学サイバーメディアセンター 4 階 PLS+C 教室において開催し、イギリス生まれカナダ在住の映画監督であるピーター・ブロウ氏のドキュメンタリー映画『寡婦たちの村』（*Village of Widows*）の上映と監督によるトーク、質疑応答、議論を行った。学内の教員、大学院生、学部生、および学外者など 35 名の参加者があった。広島・長崎に投下された原爆に使用されたウラン鉱石がカナダ北西部の先住民デネの土地で採掘され、ウラン鉱山での採掘労働に携わった先住民コミュニティや移民コミュニティに及ぼした影響、および広島における韓国人被爆者の存在にも焦点をあてるこのドキュメンタリーは、核をめぐるグローバルなサイクルを描いている。箕面キャンパスから学部生や院生を動員して、ご参加くださり当日質問やコメントをくださったアラスカ先住民コミュニティにおいて言語学のフィールド研究をされている田村幸誠先生、高度副プログラムのメンバーで同じく箕面から学生を動員くださったモンゴル遊牧民文化の研究者でモンゴルのウラン鉱山調査の経験をお持ちの今岡良子先生、言語文化学専攻の映画研究の院生さんたちに参加をうながしてくださった山本佳樹先生、そして、その他ご参加してくださった人文学研究科の教員、院生の皆様、グローバリゼーション論の受講生、懇親会までお付き合いくださった CFS メンバーや学会関係の学外参加者に感謝申し上げたい。

この共同研究プロジェクトは、さまざまな関わり方のメンバーの貢献に支えられている。今年度もハイブリッド開催の研究会に遠方からオンラインで参加し活発な議論を支えてくださった教員、修了生、院生の皆さま、充実した論文を投稿してくださった方々に感謝する。昨年の春以降、ようやく新型コロナ以前の日常の生活と研究教育活動を取り戻せた。今後も Zoom 併用で遠方の参加者の便宜をはかりながら、対面での交流の機会を持てそうなこと、楽しみにしている。最後に RA として研究会の開催や編集作業を手伝ってくれた石倉綾乃さんにもお礼を申し上げたい。

木 村　茂 雄
小 杉　世